

魔境の春はオークばかりのものではない。

他にも多数の魔物が動き出し、また、発情の時期を迎えているのだ。

オーク討伐の依頼が魔境ギルドに貼り出されて数日後、とある冒険者が意気揚々とドアを潜った。

適度な短さの茶の髪に、同色の瞳。顔立ちは普通だが、装備はそれなりにいいものをつけている。何より表情が慣れた感じがした。

その人物は、丁度冒険者の対応を終えたセエルを見てニッと笑うと、慣れた様子で近付いていった。

「よお、マスター。今年もよろしく」

「フォールドさんですか」

一方のセエルは珍しく面倒臭そうな様子を見せ、溜息までつく。普段あまり表情が変わらない事を思えば、これはかなりの変化だった。

だが、そんな事でめげるような相手ではない。フォールドは知っているように受付の椅子に腰を下ろした。

「そんな嫌な顔するなって。常連だろ？」

「通常の常連冒険者であれば歓迎するのですがね。貴方は迷惑です」

「んなこと言うなって。俺の仕事はマスターの腕にかかってるんだしよ」

「それが嫌だと言っているのですがね」

そう、まったく隠す事もなくセエルは言った。

その時、側にコトンと一つのコップが置かれ、愛らしい銀髪の少女がニッコリと微笑んだ。

「いらつしやい、フォルドのおじ様。今回はどんなモンスターを孕みますの？」

それはおおよそ、見た目五歳の少女の口から出てはいけない単語であったが、何せここは魔境。訪れる冒険者を捕獲してはモンスターが種付けをする異常生態系の森である。

しかもこの少女、見た目こそ五歳だが、実年齢は後ろにゼロが一つ追加される存在なのだ。

それを分かっているフォルドはカラカラと笑い、小さな頭を撫でた。

「アンジュは可愛いねえ。今回はまだ決めちゃいないが、狼系も良いと思ってきたんだよ。あいつらは多くても五匹。俺の腹で何とか産んでやれるし需要もある」

「狼系でしたら、ライカンが今年は多くてよ」

「ライカンか。あいつらとヤルと傷だらけなんだよな。噛み癖酷くてよ」

「本来モンスターと、望んで生殖行動はしないものなのですよ、フォルドさん」

そう、セエルは溜息をつく。

だがフォルドはニンマリと笑い、アンジュを見た。

「魔境の主にして神童の番の言葉とは思えないねえ。しかもその細い体で、神童の子を三人も産んでるんだ。望んで、だろ？」

これに、セエルは今度こそ、心底嫌そうな顔で睨んだ。

「貴方の相手は嫌いですよ」

そう、今日一番の溜息と共に吐き出した。

この男はフォルド。これでSランクの冒険者である。

だが、もう数年冒険者らしい大きな活躍はなく、もっぱらティマー相手の商売をしている。

それが、魔境で強いモンスターの子供を自ら孕み、産んで教育、調教し、販売するということでもない手法であった。

これだけ聞くと呆れるが、この男はモンスターの育成、調教、教育に関しては随一の才能を持っている。何より、自身もティマーだ。

「そういうえば、今日はブランカに乗ってこなかったのですか？」

ふと外が静かな事に気づいたセエルが問うと、フォルドは苦笑して頷いた。

「あいつ、寂しがり屋だろ？ここに預けていくといつも鳴き喚いてうるさいって聞くから、今年はロッゾを途中まで連れてきて、手前の町で帰ってもらった」

「賢明ですね。あの子、まだ親離れ出来てないんですか？」

ちなみにブランカはフォルドが産んだワイバーンの娘で、現在は彼が騎竜として  
いる。かなり立派な体格をしている。

そしてロッゾも彼の息子で、相手はハイオークだ。見た目はオークの特徴もある  
が知的で社会性がある、知能の高い上位種として、現在は彼の仕事を手伝っている。

その全てを取り上げたのが、セエルであった。

「まだって、産んで三年だぜ？ まだまだ甘えん坊の可愛い嬢ちゃんだ」

「既に嬢ちゃんという見た目ではありませんがね」

「ワイバーンなんだ、しかたがないだろ？ でもまあ、そろそろ婿さん探すのもし  
いかもな。王都の騎竜隊に掛け合ってみるか」

なんて、我が子の会話をしているがその娘はワイバーンである。

明らかに、この場にいる他の冒険者が怪訝な顔をした。

その中でも、まだ若そうな青年が声をかけた。

「あの、冒険者のフォルドさんですよね？ テイマーギルドの名誉テイマーで、モ  
ンスター斡旋商会ルギアの瞳の」

これに、フォルドは目を向けてニツカリと笑って頷いた。

「おう、詳しいな。それだぜ」

「やっぱり！ あの、俺もテイマーなんです！ ここには強いモンスターのティム

にきて。あの、コツとかあるのでしょうか！」

やや頬を紅潮させた青年に向け、フォルドはキョトツとした顔をする。  
だが既に、セエルは嫌な予感がした。

「それなら、自分で産んで育てるのが一番だぜ」

「え？ 自分で……産む？ 育てるは分かるのですが」

これに、フォルドは首を傾げた。

「この魔境は環境が厳しくて、繁殖と生き残りも厳しい。だからこのモンスターは繁殖期に目に付いた、手頃そうな奴を捕まえて自分の子供孕ませるんだ」

「えっ」

「まあ、この場所限定だけだな。そうでもしないと種の保存が厳しい環境って、そうないだろう？ 四大魔境ではあるんだぜ？」

「そう、なんですか？」

「ってことで、そういう繁殖期のモンスターに近付いて、種付けてもらって孕んだらここに来る。するとこの別嬪のお医者殿が安全に産ませてくれるから、自分で産んだ子供を引き取って教育、調教すんだ。親子だから連隊取れるし、ここのモンスターは強くて賢いからそこの奴よりいいぜ」

「フォルドさん、そういう悪い事を教えないでください。君、それはSランクまで上がったこの人だから言えるんです。普通に殺されますし、種によっては孕まされ

ただけで危険なものです。それに、ここの下位モンスターの平均妊娠期間は十四日。発見と救助が遅れれば命の保証なく群の中での強制出産です。本当に死にますよ」

一瞬、そんな方法が！と目を輝かせた若いティマーはこれを聞いて顔を悪くし、首を横に振って「正攻法で」と言っただけのメンバーと出ていった。

これを見送るフォルドは「若いねえ」と言うが、セエルからしたら止めてもらいたい。こんなのが增えると手に負えないのだ。

「……なあ、あの若いのが付いていったパーティー、なーんか人相悪くないか？」

ふと、フォルドはそんな事を言う。これに、セエルは冷ややかな目で人のいなくなつた入口を見た。

「ギルド記録では問題はありませんよ」

「……実際は？」

「キナ臭い。証拠なし。ティマーの彼はBランクで、手前の町であのパーティーに護衛を頼んだようです。タイム中の安全確保に」

「真つ当だな。見る目の無さが玉に瑕」

そう言いながらも、二人は彼を保護するとは言わない。これも一つ、経験だと割り切っている。それに、安全装置は持たせたのだ。

「さて……今年はライカンですか？」

話を切り替えたセエルに、フォルドは苦笑して頷いた。

「まあ、予定ではな。繁殖地とかどうなってる？」

地図が広げられた。内容は、モンスターの大きな生息分布図だ。

「今年はオークが幅きかせてるな。ライカンは少し奥か」

「ええ。どうやら力のある群が複数あるようだ」

おかげでここ数日、オーク素材で倉庫が大変潤っている。

魔境の素材は他の場所よりも良質。それは、主な取引部位が肉であるオークも同じ。良質で柔らかく、油が甘い。特に若いオークの肉は大変に軟らかく好評だ。

これらは即時解体されて氷魔法で管理された倉庫に収められ、余所のギルドが欲しがるとセエルの転送魔法で送られる。魔境が潤う理由でもあった。

「んじゃ、五日くらい籠もる。危なかったら即時戻ってくるから、処置頼む」

「貴方の場合事故ではなく故意なので、出産費用や処置の料金を頂きますよ」

「分かっているって。それで安全に産ませてくれるなら安い。体が資本の商売だ、そこはケチらんよ」

そう言ったフォルドに、転移のアイテムを持たせる。彼は個人で転移魔法が使えるが、それが出来ない状況もある。何よりこのアイテムは居場所を知らせる物でもあるのだ。

そうして立ち上がった時、ふとフォルドは目を留めた。

「ライカンの生息域の側に、キングスネークの領域があるのか」

それは、何となく気になった事だった。

キングスネークは数メートル級の大型の蛇のモンスターで、この時期は冬眠明け。だが同時に繁殖のシーズンでもあった。

「ああ。毎年この辺りですよ」

「あいつら、巣穴に引きずり込んで卵植え付けた後も囲うからな。レアだし、めっちゃ強いけど、そもそもエンカウントが厳しい」

「大抵は巣穴に迷い込んだ他のモンスターに托卵するか、ライカンやオークの腹に産みますからね」

主に大型の獣種を狙うのだ。

「……ちよつと行ってみるか」

「人間があれに卵を産み付けられると、卵の量が多くて腹の中で大きくなりすぎ、内側から腸が裂けますよ」

「分かってる！ そんな無茶はしないし、そもそも会えるかも分からないが、興味がある。ライカンの子供は産んだことがあるが、キングスネークはないからな」

「楽しんでるでしょ」

明らかにモンスターに孕まされる事を楽しんでいる風のフォルドを睨んだセエル。そんな彼に、フォルドはニツと笑った。



「人間じゃまず得られねえ快楽に目覚めちまってるもんでね」

「変態」

「ははっ！　ちげえねえ！」

そう言いながらも、彼は慣れた様子で颯爽とギルドを後にした。